生きもの共存の畝間から(12)

菜の花を摘む、夏野菜をまく、植える

徳野　雅仁

コマツナ、カブ、サントウサイ、ハクサイ、チンゲンサイ。畑を黄色に染めるこれらの花は春の風物誌です。野菜づくりでは、トウ立ちは収穫期の終わりを意味し、食用としての価値は軽視されがちでした。しかし、この花蕾には子孫を残すための養分が蓄えられているため栄養価が高く、春のビタミン補給に大いに利用したいと思います。菜の花の収穫は、花が一―二輪開き始めた頃、花茎の上部一〇―一五センチをポキッと横に倒して折りとります。約一〇秒、サッと塩ゆでしたおひたしや菜の花漬けのほか、半日、薄塩に漬け炊きたての御飯にまぶす菜の花めしなど、美味な菜の花料理が楽しめます。

四月に入るとハコベが急速に生長。オオイヌノフグリやホトケノザが畝を覆い緑一色になります。ソラマメが開花し、サヤエンドウがツルを伸ばす頃、夏野菜のタネまきや植えつけが始まります。サヤインゲン、トウモロコシ、エダマメは中旬から。ジャガイモ、シュンギク、サラダナ、ラディシュはいつでも、サトイモ、カボチャは下旬からです。またツルムラサキ、オクラ、モロヘイヤ、シソ、ニガウリ、キュウリなど低温では発芽しないものは五月に入ってからまく方が失敗しません。トマト、ナス、ピーマン、トウガラシの苗の植えつけも五月に入ってからですが、タネまきや植えつけ適期は栽培する土地やその年の気温によって臨機応変に行い

ます。土が肥えた自然栽培実践地では、サトイモ、ジャガイモは無肥料、無耕耘で雑草をかき分け、こぶし大の植え穴を掘り、タネイモを植えつけるだけで育ち、美味なイモが収穫できます。

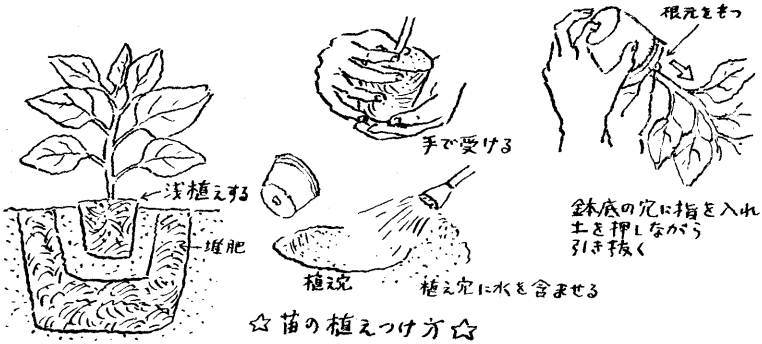
トマト、ナス、ピーマンの定植は晩霜が終わり、地温が高くなってからです。春の地温は気温ほど高くなく、晴れた日に気温が二四度あっても地下一〇センチの地温は一九度。ほぼ四―五度は低く、二センチ低くなるたびに一度ずつ地温は下がります。トマト、ナスは地温一九度以上、ピーマンは二二度以上。トウガラシは最も寒さに弱く地温が二二―二三度以上で定植します。いずれも植えつけ後に地温が低いと障害が出て育ちません。

苗の植えつけは風がなく暖かい日の日中に。植え穴に水を打ち、日光に当て地温を高めてから植えつけます。苗が倒れないよう深植えしがちですが、深植えするほど地温が低くなるため、必ず浅植えし、掌で土を押さえれば苗は倒れません。

子どもの頃に見たトウモロコシ畑やマクワウリ畑、菜の花畑など四季折々の野菜畑で出会った感動は、未だに忘れがたい思い出として心に残っています。タネまきから収穫まで野菜が育つ姿や、生きものとの関わりを学ぶなかで、子どもの心に何かひとつでも思い出が残ることを願っています。

――――終――――

（イラストレーター　イラストも筆者）



☆苗の植えつけ方☆